

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：32414

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010 ～ 2012

課題番号：22530923

研究課題名（和文） 人間作業モデルに基づく「大学生生活適応プログラム」の開発

研究課題名（英文） Development of "a college life adaptation program" based on the Model of Human Occupation

研究代表者

山田 孝 (TAKASHI YAMADA)

目白大学・保健医療学部・教授

研究者番号：70158202

研究成果の概要（和文）：

本研究ではステューデントアパシーやユニバーシティブルーなどと表される大学生を対象とした「大学生生活適応プログラム」の開発を進めた。本プログラムの特徴は、当事者である学生に自己評価の手法を教授することで、学生が自分の判断で自分にとって必要な行動を同定し実行できるようにする点にある。全国の国公立私立大学4校に通う1-3年次学生262名を対象とした実態調査の結果を踏まえ、「大学生生活適応プログラム（暫定版）」を開発、試行し効果を検証した。その結果、本プログラムは学生の友人間のソーシャル・サポートや時間拘束感に良好な影響を与える可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：

In this study, we intended for the university students who have student apathy or university blue to develop "a college life adaptation program". It is a characteristic of this program that a student clarifies a necessary action by a self-judgment for oneself and gets possible to carry out by teaching him/her self-assessment. We intended for 262 students from freshman to junior who went to four public and private universities and technical school of the whole country and performed fact-finding and developed "a college life adaptation program" (a provisional version) and inspected of its effect. As a result, it was suggested that this program had an excellent influence on a feeling of restriction in social support and time of a friend interval of a student.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：大学教育，精神保健，生活不適応

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

(1) 大学入学を果たした学生が、義務教育との違いや増加した自由時間の活用に戸惑うのは特別なことではない。悩みながらもアイデンティティーの確立とそれに合致したライフスタイルの構築に向かうのが大学生活である。しかし、大学全入時代を迎え、入学生の多様化が進んだわが国では、ステューデントアパシー（無気力、無関心）やユニバーシティブルー（やりたいことが見つからない）などと表される大学生活不適応学生の存在が社会問題化しつつある。申請者の勤務する大学においても進路に悩む学生や留年、休学を選択する者が増加している。さらに全国的にみれば自殺者の増加など、その問題は深刻化している。

これに対し受け入れ側の大学も様々な取り組みを行っている。しかし有効な方策は未だ確立していない。取り組みの例としては、相談室の設置、就学カウンセラーの配置など従来の体制を強化するものから、教員参加の宿泊研修、学生間交流促進を狙ったグループ学習課題の提示、クラス担任制度の導入、さらには三者面談や家庭訪問など保護者を巻き込んだ取り組みも見られる。しかしこれらの成果の程は定かではない。

(2) 申請者らは 2005 年より、自治体の協力を得て、地域在住高齢者を対象とした健康増進プログラムを実践している。このプログラムは、体操や筋力強化、転倒予防など従来の高齢者施策でおこなわれているようなあらかじめ決まった運動メニューに参加させるものとは異なり、参加者自身に自分の生活状態を評価させ、本質的に自身の生活どのように変えたい（または維持したい）のか、さらにはそのための行動も自分で見いだしてもらった内容となっている。このプログラムの有用についてはこれまでに報告している^{1~3)}。

プログラムの理論的背景には、人の日常活動の組織化を説明するモデルである人間作業モデル（Model of Human Occupation MOHO）⁴⁾ を活用している。このモデルは人の生活を「意志(volition)」「習慣(habituation)」「遂行(performance)」の3つの概念から成る開放系と環境(environment)と捉えている。MOHO は特定の疾患や障害の回復にも応用されているが、本質的には人の日常生活の組織化を説明するものである。従って、日常生活や社会生活において不適応状態にある者を適応状態へと導くプログラムに応用できる。

(3) 大学生生活の不適応は、MOHO の視点

からすると、自分の価値観や興味の認識および能力の自己認識に関わる「意志」、他者との交流や学生としての課題遂行に関わる「遂行」、満足できる日課や役割に関わる「習慣」に問題があると説明できる。

文献

- 1) 山田孝, 小林法一, 他: 健常高齢者に対する予防的作業療法(65歳大学)のランダム化比較試験による効果の検討. 日本公衆衛生雑誌 55(特), 2007.
- 2) 川又寛徳, 山田孝: 基本的日常生活活動が自立している虚弱な高齢者に対する人間作業モデルに基づく予防的・健康増進プログラムの効果に関する研究. 作業療法 28 (2): 187 - 196, 2009.
- 3) 川又寛徳, 山田孝: 有料老人ホームで生活する自立した高齢者に対する人間作業モデルに基づく予防的・健康増進プログラムの効果に関する予備的研究. 作業行動研究 11 (2): 10-16, 2008.
- 4) Gary Kielhofner: A Model of Human Occupation: Theory and Application. Williams & Wilkins, 1995.

2. 研究の目的

これまでの地域高齢者向けプログラム開発の実績を踏まえて、大学生向けの生活適応プログラムを企画、試行し、有用性を検証する。

3. 研究の方法

本研究は、次の3段階に大きく分けられる。

○第一段階：大学生のニーズ調査

大学生を対象にMOHOの重要概念に基づく質問紙調査およびインタビューの実施と分析により、プログラムに求められるニーズを特定

[調査方法]

* 質問紙調査

- ・ 学生生活全般…OSA II, ソーシャル・サポート質問紙, 大学生生活不安尺度, 心理的適応
- ・ 学習面……………学習特性に関する質問紙, 学業意欲低下・授業意欲低下尺度, 学業に対するリアリティショック尺度

* Focus Groups Interview

10名程度の学生グループを形成。大学生生活適応プログラムで取り上げるべきテーマについてグループ討議させ、問題・課題を抽出する。

○第二段階：大学生生活適応プログラム（暫定版）の開発

ニーズ調査の結果を踏まえて、申請者らがこれまでに開発した高齢者版生活適応プログラム1, 2) を改訂

○第三段階：プログラムの効果検証

参加希望者を公募で募り、大学生生活適応プログラム（暫定版）を試行。対照群として非介入群を設け、群内前後比較および変化量の群間比較デザインによる効果検証

文献

- 山田孝, 小林法一, 他: 健常高齢者に対する予防的作業療法(65歳大学)のランダム化比較試験による効果の検討. 日本公衆衛生雑誌 55(特), 2007.
- 川又寛徳, 山田孝: 基本的日常生活活動が自立している虚弱な高齢者に対する人間作業モデルに基づく予防的・健康増進プログラムの効果に関する研究. 作業療法 28 (2): 187 - 196, 2009.

4. 研究成果

(1) 大学生活への適応に関する課題

《質問紙調査—その1》

対象：札幌, 秋田, 仙台, 東京の国公立大学4校に入学した1年生 102名 (19.3 ± 2.40歳, 男28, 女74名)

調査：「作業に関する自己評価-改訂2版

項目 (OSA II)」「意欲低下領域尺度」

結果：大学生の抱える課題/問題はある程度共通していた。「自分の課題に集中する」「生活している所を片づける」「自分の能力をうまく発揮している」など上位5項目はいずれも40%以上の学生が「問題あり」と回答した(表1).

抱える課題/問題と意欲との間には有意な相関が認められた(表2).

共通した課題/問題に焦点をあてたプログラムを展開することが、大学生活への適応促進に繋がる可能性が示唆された.

《質問紙調査—その2》

対象：国公立大学4校の学生 262名 (女性170, 1年生96名, 2年生112名, 3年生54名)

調査：「ソーシャル・サポート尺度」

項目「大学生生活不安尺度」「意欲低下領域尺度」「学業に対するリアリティシヨック尺度」

結果：男女別の比較では、ソーシャル・サポート(家族)において女子学生の方が

有意に良好な支援環境にあることを示した。一方、男子学生は学習意欲が有意に低く、さらに教員不満、講義内容不満、履修不自由感の得点が有意に高かった。

アルバイトを週4日以上している者としなない者とは、後者の方が大学生生活不安尺度と時間的拘束感において有意に不安や不満の得点が高かった。

学年別の比較では、ほぼ全ての尺度で高学年になるほど良好な方向へと平均得点に変化していた。

表1 大学生の抱える課題/問題ランキング

難易度 rank	項目	難度値 (logits)	「問題あり」または「やや問題あり」
1	自分の課題に集中する	0.92	52%
2	生活している所を片づける	0.87	49%
3	自分の能力をうまく発揮している	0.83	48%
4	やらなければならないことを片づける	0.54	47%
5	やるうと決めたことをやり遂げている	0.46	42%
6	満足できる日課がある	0.40	38%
7	他人に自分を表現する	0.29	35%
8	金銭の管理をする	0.20	35%
9	めんどろ見なければならぬ人を見る	0.18	27%
10	自分の目標に向かってはげむ	0.17	36%
11	体を使ってしなければならぬことをする	0.13	31%
12	問題をはっきりと認めて解決する	0.09	32%
13	学生, 勤労者, ボランティア, 家族の一員などの役割にかかわる	-0.05	30%
14	身体に気をつける	-0.07	29%
15	自分が重要だと思うことに基づいて決めている	-0.18	26%
16	自分の責任をきちんと果たす	-0.32	19%
17	行かなければならぬ所に行く	-0.43	14%
18	他人とうまくやっている	-0.49	19%
19	基本的に必要なこと(食事, 服薬)を行う	-1.05	18%
20	自分の好きな活動を行う	-1.11	13%
21	くつろいだり楽しんだりする	-1.39	8%

* 難易度値はラッシュ分析モデルにより算出した。

* 表右の数値は、「問題あり」「やや問題あり」と回答した大学生の割合を示す。

表2 OSA II (有能性尺度) と意欲の相関

	意欲低下領域尺度		
	学業	授業	大学生生活
有能性尺度	-.415	-.263	-.273

* 表中の値は相関係数。1%水準で全て有意。

《Focus Groups Interview》

以下のような「学生の抱える課題, 問題」の具体例(一部のみ掲載)が明らかとなった。

- 友人に誘われると断れなく、時間が足りない。
- 自分を他人に表現するのが下手、疲れる
- 勉強についていけない心配
- 物事に集中できない。

(2) 大学生生活適応プログラム(暫定版)の開発

上記(1)の研究成果を踏まえ、表3に示すプログラムを考案した。

表3 大学生生活適応プログラムの概要

回	前半	後半
1	オリエンテーション	初期評価
2	MOHOの概要	価値(講義)
3	価値(演習)	興味(講義)
4	興味(演習)	
5	役割(講義)	役割(演習)
6	習慣(講義)	習慣(演習)
7	技能(講義)	
8	技能(演習)	個人的原因帰属(講義)
9	個人的原因帰属(演習)	環境(講義&演習)
10	テーマ別個人発表 A. 今後行いたい作業、 大事にしたい作業 B. 作業的存在としての私の個性	最終評価

- ★学生は己の大学生生活を主体的に評価する
- ★課題や目標を自分で同定し、行動する

より適応的な大学生生活の構築
(=生活を構成する作業の入替)

(3) プログラムの効果検証

対象：北海道、東京、沖縄の作業療法士養成校3校の学生. 実験群37名(20.6歳)、対照群33名(21.5歳).

効果：ソーシャル・サポート質問紙、学業に対するリアリティショック尺度

結果：両群間の変化量の比較において、ソーシャル・サポート(友人)(1.6 vs. -0.2)、リアリティショック尺度の下位尺度「時間拘束感」(-0.1 vs. 0.3)で有意差(p<0.05)が認められ、いずれも実験群が良好な結果であった(図1, 2).

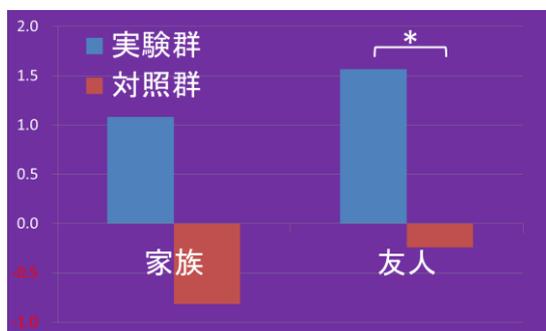


図1 ソーシャル・サポートの変化量の比較

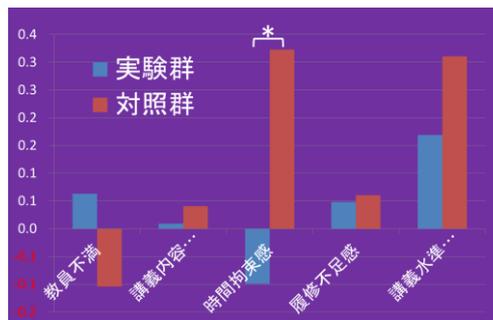


図2 学業に対するリアリティショック変化量の比較

(4) まとめ

- ・大学生の抱える課題/問題について調査を行った。
- ・その結果を踏まえて、大学生生活適応プログラム(暫定版)を開発した。
- ・効果検証の結果は、本プログラムが、友人間のソーシャル・サポートや時間拘束感に良好な影響を与える可能性を示唆した。
- ・本研究の結果をうけたプログラム内容の精査と、実施大学、および対象人数の拡大が今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計5件)

①山田 孝, 小林法一, 川又寛徳: 学生生活適応プログラムの効果. 第47回日本作業療法学会, 2012年6月, 大阪.

②小林法一, 山田 孝, 川又寛徳, 石井良和: 作業療法学生の大学生生活適応状況に関する調査. 第47回日本作業療法学会, 2012年6月, 大阪.

③小林法一, 山田 孝, 川又寛徳, 石橋裕, 谷村厚子: 大学生の日常生活上の課題、問題に関する自己認識 作業療法士を目指す学生の場合. 第70回日本公衆衛生学会総会, 2011年10月, 秋田市.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 孝 (TAKASHI YAMADA)
目白大学・保健医療学部・教授
研究者番号: 70158202

(2) 研究分担者

小林 法一 (NORIKAZU KOBAYASHI)
首都大学東京人間健康科学研究科・教授
研究者番号: 30333652

(3) 連携研究者

なし